



Title	編輯を終へて
Author(s)	山本, 檣信
Citation	懷徳. 1942, 20, p. 66-68
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/89095
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

仁寺にて晝食後解散する、參加者二十餘名、

▲九月二十七日

天沼先生の御指導による京

都南禪寺と銀閣寺との見學會を催す、參加者

四十名、

編輯を終へて

幹事 山本 檣 信

十二月八日のあさほらは來た、眞つ赤を生れて初めての偉大な太陽をみた、すべての人たちは美しき感激の中に立つた、日本のすべての人が日本人としての本當のたましひをつかんだ、米英に向つて開戦最初の報に接し、來るべきものが來た。東亞の興廢まさに此の一戦にあると、袂を蹴つて起き、潔齋して神棚におひか

りを獻じ、清淨潔白な心に拍手をうつて、祖國日本の勝利を祈願した、同日正午には、宣戰の詔勅が降下した。二千六百第一年の最後に宣戰が布告されたのである、近衛内閣總辭職の報に接し、此の未曾有の重大時局に際し、大命を拜して、帝國不動の國是を遂行して世界平和に寄與し、皇國三千年の歴史をいやが上にも光輝あらしめんと誓はれた東條首相の鐵石の意志は、果敢なる實行によつて示され、日本があかるくなつた氣がした。國民は喜びと勇みとを以て勝ち抜く確信と、國に殉ずるたくましい覺悟が出來た。今こそ御奉公のしどきである。今こそ生くる甲斐あり、死ぬる甲斐ある千載一遇の好機であることがわかり、壯烈鬼神をなかしめる日本人の永遠の生くる道が自ら會得される。

人事の最善を盡すとき、神助天祐が下つて必勝疑ひない、大日本は神國である。

が併し勝つたあとをうまく治めてゆくには、何百年の努力がいる、權力が聰明と良心との基調の上に用ひられることの急務なる、今日より甚だしきはない、皇軍の占領したる土地の人民をして、我が國に隨喜信服せしむるを要す、詮ずるところ徳を以て懷け、力をもつて守る。この以外には、妙策もなければ、奇計もない、慈悲である故に必ず勝つ、從來三千年來の文化があるにかゝはらず、米英等の桎梏のもとに呻吟して居つた大東亞の諸民族は、今や八紘一字の大精神に抱擁せられ、各々その本然の姿に復歸し、新しき世界秩序建設の翼を擔當して、新生の第一步を踏み出すに至つた。勤儉以て米國の

生産力を凌駕する經濟力を獲得するとともに、東亞の盟主としてはづかしからぬ人格をもつて指導しなければならぬ、結局教育である、論語孟子を讀んで、それがわかる人間でないことと事業を大成することは不可能である。行ひ篤敬にして忠信なるものでないといかない、洋々たる前途に對し、大きな規模の構想が必要である。

支那事變以來の發展ぶりは、東京と大阪では桁違ひである。重工業は高等な技術を基礎としたもので、算盤だけではいけない、頭が要る、學問的の工業であつて、學問の都である東京が、飛躍的發展した所以である。今後は餘程教育に力を入れ、裸で出直す覺悟がなければ大阪は衰微する。貿易が基準である日本の經濟に於て、大阪を東亞共榮圈の中心たらしむるやう、新し

い大阪の建設に當らねばならない、いふまでもなく大阪は昔からの商都である。商人は實力の信者であり、喧嘩せず、議論しないのを以て本領とする。だから工業人と雖も眞の商魂に徹し、時局にめざめた以上、ことあげせず黙々として實力涵養に専念するのは、當り前の話と云はなければならぬ。浪華文化の傳統に生き、講師諸先生の眞劍なる御指導と理事諸先生の熱意ある御援助とによりて、事業いよいよ發展し、再建以來、講筵を開くこと四千回風教に寄與するところ多く、曩にかしこくも天聽に達し御内帑金を賜はる光榮に輝く本堂である。聽講生は日夜聖恩に感泣しつゝ、學業の修得に智徳の練磨に孜孜として努めつゝある、他日、北に南に西に東に、遠く海外に活躍するとき、若

き日、此の堂に來り學びて體得せし精神を發揮し、學術を活用して御稜威を八紘にあまねかしむる聖業を翼賛し奉りて、聖恩の萬一に報ひ奉らねばならない、會誌懷徳も刊行すると二十回、支那學の權威である本堂講師東北帝國大學教授武内義雄先生の懷徳堂の經學と題する講演筆記、及び中井木菟麻呂先生の舊懷徳堂を聽く會に於ける談話筆記等、及び時局柄砂糖の害を説く先儒中井履軒先生の「老婆心」五卷を附録として刊行することになった。熟讀されて修養に資せられるところあらば、幸甚である。